

生きていければいい

証人

沖縄戦を体験した人たち



須藤尚俊

カメラマン

私はプロのカメラマンとして働きながら、また作品として人の顔写真を数多く撮ってきました。そのような経験を生かし、おひとりおひとりの生きてこられた人生の何か大切なものが写真からにじみ出るようなものができればと思っています。そして、その写真を通して、見てくださる人たちの心に何か新しい動きが生まれれば、それは平和への動きにつながるのではないかと信じます。

うなぎしやんぷみい

上門文子



やんばるに疎開しててや、
十三祝いの着物売って食べも
のもらったね。
人は死ぬときは水が飲みたく
なるのかね、
河原沿いで餓死してるのを
二、三人見たね。





大城良徳

おおしろりょうとく



そのときはまだお腹の中にいて
ただでさえ大変なのに、
身重の体で南部から戦争の中逃
げ回って。

中城の喜舎場の竹藪の中で生ま
れたって。

そんなして生んでくれた母のこ
とを考えるとね

感謝しても感謝しても、感謝し
きれないや。

大城静江

おおしろしずえ





目の前で自決するのを見てますね。その破片が刺さって気絶して、自然に目が覚めて、ああ、私は生きているんだなと思って。それで、三つ編みだったから四年生のお姉さんとわかって、救急靴の形で一校女の先輩だなとわかって。生きてるから言えるんだけど、お名前を聞いておいたらよかったですらなと思って。6月20日に自決したんだけど、18日に解散命令が出たんですね。



徳元文子

とくもとぶんこ

夕方に北名城の浜に行つて
ね、親もないとわかつてい
たから泣いて泣いて泣いて
泣いて、死のうかねと思つ
てね。

涙も涸れて「浜千鳥」を歌
つたさ。

「夜鳴く鳥の悲しさは、親
を訪ねていく百里・・・

・・・月の国へと消えてゆ
く銀の翼の浜千鳥」



大城康秀

おおしろやすひで





垂直に五メートルも降りる壕にいたんだが、アメリカさんが入ってきて、銃を突きつけられるはしたんだが、そこにいた百名からの人が捕虜になつて。

老衰してか、死にそうなおばあさんがひとりいたんだが家族も連れて上がりきれなくて、お菓子を少しだけおいてきたんだがアメリカさんがそれを見つけて、おぶつて上がってきたんですよ。

捕虜収容所に一年いて、糸満に帰ってきてまで元気だったです。



山城信子

やましろのこい

あつちは日本、こっちの真栄平はアメリカがいたんでしょね。

機関銃がアメリカの方からきて、

「どうしたのお母さん」といっても何も言わない。

だめだよ、と手をふってね、

声は出るけど何を言うか聞こえない。

「なにかいえよね、お母さん」

それでも泣かないですよ、そんなときは。

いくさゆや、なだゆかわち

思い出す一字一字に涙のうるむ

戦争の時は涙も乾き果ててしまったが、当時のことを思い出しながら書き留めると、

一字一字書くごとに涙があふれてしまう



山城初子

やましらはつこ





やんばるに疎開してはいたんですけど、ソテツ地獄でした。マラリアが蔓延して、妹がやられて、ずっといつも震える小さな手を握ってました。けど、餓死でした。板きれもないし、母は缶詰かんからあを目安に、海岸の奥の方に埋めてきました。戦後骨は拾ってきたと言っていました。



山城千枝子

やましろちえこ

親戚の壕にいたんですよ。
姉はトイレのかんからあを
外に出しに行こうとして
壕の外に出たときに、
目の前に爆弾が落ちたんで
すよ。
爆風で吹っ飛ばされてか
ら、耳から血が出たんです
よ。
吹っ飛ばされただけで、
命は助かったんだけどよ
いまも耳が聞こえない。





謝敷ト三

しゃんきよみ



夜しか出られんから、夜水汲
みに行つて、
わからんもんだから、そのま
ま飲んで。

飛行機が飛ばない朝のうちに
また汲みに行つたら
もうここん中にたつくさん人
が倒れているわけよ。

今でも忘れられませんが、国吉
の村井戸でした。

血の水まで飲まされたなあと思
います。



久手堅憲一

くでけんけんいち

本当は乗る予定ではなかったらしいんですが、津島丸よりも三日前の疎開船で鹿児島に行つて。・・・疎開して負い目もあるわけですよ。生き残されて「何か人のためにしなければ」というのがいつもありました。それが今の福祉施設の仕事をさせているんだと思いますね。振り返ってみると、生かされているんだなという感じがしますね。





宮里盛一

みやざきとせいち



父親が防衛隊に招集されて戦死しているもんですから、戦後母親一人で私を育てるのにずっと金銭に追われていました。

高校に入って野球部に入ったんですが、グローブを買ってといえない。「参考書買うから一ドルちょうだい」とか嘘を言ってお金を貯めて買ったりしましたね。



金城善昌

きんじょうぜんしょう

父は良き判断をしたなあといまも感謝してま
す。

家族して防空壕を出て部落を通って捕虜にな
りにゆくと、遠くに十名一列横になってアメ
リカ兵がいる。

父に手をつながれてあと十メートル、
五メートルと近づいてゆく。

黒人の兵隊が銃を私たちに向けて、笑いなが
ら「行け」と銃を動かしたときは、これで死
ぬんじゃないんだと思いました。

でも本当は、いちばん怖かったのは、
日本軍が出てこないかということでした。

同じ壕にはほかに四家庭十四名がいたんです
が、戦後、部落の遺体収集をしていた父が壕
を見てきて、

手榴弾で死んだような散らばり方だと言って
ました。





大西正子

おおにし まさこ



父赤ちゃん泣くからと壕から追
い出され、墓の中に避難していた
んですね。

周りにはそういう方がいっぱい
たんですね。

ある時外に出て夕ご飯の支度をし
ていたら、花火のように照明弾が
上がって、隣にいた方たちが艦砲
射撃の直撃をうけたんです。

そしたらそれが宙に吹っ飛んで、
肉片が私の体中にへばりついたん
です。

そのときの恐ろしさといった
ら。。。。

大城盛昌

おおしろせいしょう



二月の一五日に防衛隊に招集されて、隊長
当番になりました。

摩文仁の墓のところまで追い詰められて、
自決することになりました。

残っていた缶詰を全部食べて、手榴弾を渡
されたんですが、

そこで、ふだんはとても厳しい井上兵長が

「沖縄の君たちはまだ若いし、生きて
いれば家族に会う機会もあるだろうか
ら、アメリカの捕虜になって苦しけれ
ば、いつでも死ぬ機会はあるから、君
たちは自決させないから」
そう言ったんです。

パンツ一枚つけて壕から出されました。
捕虜番号は六三五六番でした。

